養成医かわら版

NEWSLETTER



自己紹介：
名前：劉安依
勤務先：神戸大学産科婦人科
診療科：産婦人科
卒後：6年目
経歴：
2021年4月 製鉄記念広畑病院→兵庫県立はりま姫路総合医療センター　初期研修医
2023年4月 産休・育休
2024年4月 兵庫県立丹波医療センター
2025年4月 兵庫県立はりま姫路総合医療センター
2026年10月 神戸大学医学部附属病院

【産婦人科医を目指した理由】
もともとは別の診療科を志望していましたが、初期研修でローテートする中で、自分には向いていないのではないかと感じるようになり、進路について悩んでいました。そんな中、産婦人科ローテでお産に立ち会ったことが大きな転機となりました。赤ちゃんの産声を聞いた瞬間の感動や、お母さんに「おめでとうございます」と声をかけることができる喜びは、今でも印象に残っています。また、手術に対しては苦手意識がありましたが、実際に経験してみると、自分の手を動かして治療することの楽しさを知りました。産婦人科は、手術などの外科的な治療だけでなく、内科的な診療にも携わることができ、両方の魅力を感じられる診療科です。こうした経験を通して、産婦人科に大きな魅力を感じ、志望するようになりました。

【養成医の産婦人科医として】
養成医として働く中で、大学医局とは異なる人事体制で勤務することに不安を感じることもあります。一方で、養成医という枠組みの中で、他科にも先輩医師がいることは大きな支えとなっています。地域医療について、これまで特別に強く意識してきたわけではありませんが、赴任先の病院が地域の中でどのような役割を担っているのか、また、その地域で暮らす人々の個性や社会的背景はどのようなものかを考えながら日々の診療にあたるようにしています。そうした一つひとつの積み重ねが、結果として地域医療への貢献につながれば嬉しく思います。産婦人科医として、以前よりもできることが増えてきたことに成長を感じる一方、まだまだ学ぶべきことは多くあります。今後は後輩の指導にも携わりながら、自分自身の知識や技術もさらに高めていきたいと考えています。

【仕事と子育ての両立】
専攻医1年目で子どもが生まれ、仕事と子育ての両立に苦労しました。職場の理解や家族のサポートも十分に得られず、心身ともに疲弊し、休職を経験したこともあります。一時は産婦人科医、さらには医師を辞めることも考えました。しかし、異動を機に環境が変わり、周囲の理解や上級医の配慮もあって、安心して診療に取り組めるようになり、少しずつ成長を実感できるようになりました。同期と比べて自由な時間が少ないもどかしさはありますが、その分、仕事の効率化や隙間時間の活用を意識しています。子どもも成長し、少しずつ余裕が出てきた今、今後は資格取得などにも積極的に取り組んでいきたいです。

